

第八異聞帯～人理継続 保障機関カルデア～

紫龍院成弥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、クリプターに襲われなかったカルデアが異聞帯として存在したら――

もしも、藤丸立香が最後のビーストであったなら――

これはそんなもしもの話

よくTwitterで見かけるぐだビースト説やカルデアが第八異聞帯だったら面白いというのを個人的に話にしてみました

1月20日ぐだ英霊編スタート

原作とはだいぶ内容が異なるのでアンチ・ヘイトタグ追加しました

作者のTwitter↓ <https://twitter.com/shiryu>

u
i
n

目次

最後の異聞帯	1
ぐだ英霊編	
マテリアル	7
マテリアル2	13
カルデア英霊召喚第4号『サラীগ』	20
平行世界	24
白亜の少女	29
雛芥子と認められたい少女	34
日曜日	43
終わりの始まり	47

番外編

バレンタイン特別編〜チョコレートカ ルデアス〜	53
----------------------------	----

最後の異聞帯

『今からこちらに帰還してもらいます。最後の異聞帯お疲れ様でした』

シオンさんからの通信が入る。僕ら汎人類史は第七異聞帯、そしてクリプターのデイビットさんを倒してカルデアに戻る

けど最後の戦いは残ってる。まだ…

最後のビーストが

皆?????????
「皆さんお疲れ様でした！これで汎人類史も元に… 嘘… まだ白紙化されたまま…」

覚悟を決めろ。藤丸立香！

「皆本当にお疲れ様」

僕は1歩前に出て皆に声をかける

「先… 輩… ?」

「マシユもダ・ヴィンチちゃんもホームズもシオンさんも新所長もムニエルさんもみんな本当にお疲れ様」

皆が僕を見る

「本当に長かった… ロマニがいなくなつて… カルデアは襲われて…」

「立香くん？ どうしたんだい？」

「皆気付かなかつた？ 僕達が相手にしてきたビーストの数」

「それは… 6体ですけど… あっ！」

「気付いたかな？ 僕達が倒してきたビーストは6体。まだ最後の1体が残つてるんだ」

「心当たりがあるのかな？ ミスター立香」

「わからないの？ ホームズ。心当たりがあるも何も、僕が最後のビーストなんだから」

皆は僕の発言に目を見開き僕を見てきた

「改めて。ようこそ。最後の異聞帯。人理継続保障機関カルデアへ。僕は『犠牲』の理をもつビースト」

僕は正体を明かした

「先輩… その姿は…」

「言つたでしょマシユ。僕が最後のビーストだつて。僕を倒さない限り汎人類史は元には戻らない。でもいいんじゃないかな？ だつて今までいろんな人が『犠牲』になつてき

たんだもん。特異点を元に戻すためにあらゆる『犠牲』を払ってまで聖杯を探した。史実とは別になっていいるから聖杯を手に入れれば特異点は修復されて死んだこともなかったことになる？それでもその時間は確かに流れてるんだ。世界が別かの話じゃないんだよ。死んだか死なないかの話。それに特異点を全て修復したってその『犠牲』になつたのはロマニだった。異聞帯でもそう。異聞帯に住む人達の『犠牲』で僕らは汎人類史に戻そうとしてきた。その『犠牲』の数々が僕をピーストへと追い込んだ。だから僕は決めたんだ。僕が絶対的な力を持つて支配すれば誰も『犠牲』にならずに済むって。いい考えじゃない？その僕の考えの結末がここ。クリプターに襲われなかったかもしれない。カルデア。争いもないから誰も『犠牲』にならない。最高じゃないか。クリプターの人達やロマニもいる。誰も悲しまなくていい世界。マシユもそんな世界の方がいいよね？」

「わ：： 私は：：」

「ああ、そっかごめん。マシユ達からすれば汎人類史の方が大切だもんね。なら僕を倒すといい。僕という『犠牲』を超えてこれから先も数々の『犠牲』を生み出すといいよ。：： まあ、僕に勝てればだけどね」

僕は魔力を高める。ピーストになってから抑えてきた魔力を

「この魔力反応は：：！」

「僕の魔力だよ。ピーストになってから押さえ込んできたんだ。さあ、数多の人類史の英霊たちよ！そして冠位を授かりし英霊よ！最後の人類悪！藤丸立香を倒して見せる

!!

????????????

「はあ… はあ… 先輩…」

あれからどれくらいの間が経ったんだろう

数時間か、はたまた数日か

僕はついに地面に倒れふした

僕の目の前に立っているのはマシユやサーヴァントに守られていた職員。ダ・ヴィンチちゃん。それとマーリンとギルガメッシュだ

「本… 当に… 僕は… 負けたんだね… 悪は必ず正義に敗れる… はは… エミヤの言った通りだ…」

数々の英霊を殺した

座に選した

今まで一緒に旅をしてきた皆を殺すのは辛かった

座に選えず

かつてピーストであったキアラやカーマを殺した時の顔が憐れみだったのを覚えて

座に選した

いる

「マスター。君ほど人類悪に相応しい人間はいないよ。『犠牲』を背負い続けた結果が君をピーストにしてしまった。それでも君は『犠牲』を減らすために奔走した。『犠牲』を減らしたいがために支配者になる。それは『人類愛』とそう変わらないと僕は思う。そして君は英霊を座に還す時に哀しい顔をしていた。君がピーストにならない世界があるのなら……僕はそう考えてしまったよ」

「かつて我は言ったはずだぞ？ 人類愛とは即ち人類悪であると。まさか貴様が人類悪になるとは思いもしなかったがな。だがピーストになろうとも『犠牲』を減らそうとしたその尽力、実に大儀であつた。しばらく休むといい」

「ははっ……まさか2人から……そんな事を言われるなんて……」

「マスター君。君に無茶をさせすぎたみたいだ。君は常に弱さを見せず特異点や異聞帯を解決してきた。私達はそれに頼り切つてしまつたのかもしれない。いや……頼りきつていたんだ。君の気持ちも考えずに。汎人類史の為にロマニが『犠牲』になつたと君は言つたね。君もその『犠牲』になつてゐるのを気付いていたかい？ 今がその状況だ。君という『犠牲』で汎人類史は元に戻る。君の嫌いな『犠牲』だろう？」

「言つただろダ・ヴィンチちゃん……僕は元々……負ける気なんてなかつたんだ……僕が支配者になつて『犠牲』のない世界を作る……カルデアなんて障害にさえならないと

思ってた：：これじゃあ：：他のクリプターと同じだね：：」

僕は壁に寄りかかって座りながら立っている皆を見る

話すのもやつとなこの状況が僕を死へと誘う

「先輩：：先輩はいつも笑って過ごしていました。その笑顔の裏にこんな事を考えていたなんて思いませんでした。『犠牲』を背負ってきた先輩の辛さは私では図りきれません。ピーストIVの『犠牲』で蘇った私には何も出来ません：：でも先輩が守ったこの世界で皆で生きていくのが私の夢なんです。先輩も必要なんです。だから：：！」

マシユが何かを言っているけどもう何も聞こえなくなつた

「ねえマシユ：：僕は：：どこで選択を間違つたのかな：：」

ぐだ英霊編

マテリアル

アルターエゴ『サ■■■■』

筋力：C 耐久：A

敏捷：B 魔力：A+

幸運：D 宝具???

身長／体重：184cm／??kg

出典：???

地域：???

属性：混沌・善 性別：男性

謎に包まれたサーヴァント。現段階ではあまりにも情報が無すぎる。どの文献にも属さない英霊。

《保有スキル》

■■■眼（■■）B

敵単体の弱体耐性をダウン&自身のNPをすごく増やす

ランク：???

種別：対界宝具

彼はこの姿で宝具を1度も使ったことは無い。

ビースト『藤丸立香』理『犠牲』

筋力：B 耐久：A++

敏捷：A 魔力：EX

幸運：B 宝具：EX

身長／体重：184cm／??kg

出典：人理保障機関カルデア

地域：日本

属性：混沌・悪 性別：男性

アルターエゴ、サ■■■■の正体。それはかつて人理を救った藤丸立香。人理修復時の数々の『犠牲』が彼をビーストへと変貌させた。

千里眼（終） B

彼がビーストとなって得た力。彼の目には数々の『犠牲』の場面が写し出される。

星詠の使者 A

彼がかつて英霊を使役していた時の名残。自身の魔力を他へと分け与える。

ある少女への願い B

彼が最も大切にしていた少女。

彼女への攻撃は何人足りとも許さない。

獣の権能 A++

対人類、とも呼ばれるスキル。

いかなる『犠牲』を伴う攻撃は彼には効かない。

ただしある少女の攻撃には傷を負う。

単独顕現 A+

時間移動さえも可能にする。

終局の獣として他のビーストよりも強い力になっている。彼にレイシフト適正があつたのも他のビーストよりランクが高い理由の一つと思われる。

自己犠牲 A

彼が最も嫌っている『犠牲』。自身が『犠牲』となり他者の『犠牲』を減らそうとする信念を持つ。

ネガ・サクリアアイス B

自身の魔力を空気中に流し込むことで周囲の空気を自身の権能を持った魔力瘴気に

組替える。

この瘴気の中にいるものは『犠牲』を伴わない攻撃をすることが出来ない。
宝具

『あの頃の日々を』

ランク：EX

種別：対界宝具、対獣宝具

グラランド・オーダー

第1宝具。これは全てを救う物語。

かつての仲間の少量の霊基を元に作り上げた大剣。

その大剣は自身が敵とみなしたものを必ず切り裂く。

『犠牲なき世界などありえない』

ランク：EX

種別：対界宝具

サクリファス・メルクリア

第2宝具。『犠牲』とは人間が誰しも行う愚の所業。

『犠牲』を行なったことがあるものには彼の出す魔力の冷気には耐えられない。

人類を滅ぼす厄災の獣。その中で彼は終局に位置する。人理焼却・人類白紙化の冒険

の中で数々の『犠牲』を見た彼の心は荒んでいた。彼の心は数々の『犠牲』に耐えられなかった。

『犠牲』のない世界などありえない。分かっているながらも彼は『犠牲』のない世界を作ろうとした。その結果彼は厄災の獣へと成った。

その名をビーストⅦ。

七つの人類悪の一つ。『犠牲』の理を持つ獣である。

マテリアル2

召喚

「サーヴァント、アルターエゴ。サラীগ。そうか…ここはカルデアか…」
開始

「あんまり魔術とかは得意じゃないけど頑張ろう」

スキル1

「こういうのはどうか？」

スキル2

「それ！」

スキル3（ある少女への願い使用時）

「マシユ、これで頑張ってる」

コマンドカード1

「任せて」

コマンドカード2

「噛まないように噛まないように」

コマンドカード3

「えーっと」

アタック1

「ははっ」

アタック2

「脆い脆い！」

アタック3

「甘い甘い！」

エクストラアタック

「ここをこうしてこうやって… え？キャラが違う？」

ダメージ1

「いったいなく」

ダメージ2

「うっ…」

戦闘不能1

「また…ダメなのか…！」

戦闘不能2

「ごめん…！マスター…！」

勝利1

「前戦った時より弱い…？」

勝利2

「無事かな？マスター」

レベルアップ

「ありがとうマスター」

霊基再臨1

「ちよっ！やめてくれマスター！霊基再臨だからってローブを取ろうとしないでくれ！！」

霊基再臨2

「姿が変わってないって？もっと頑張れってことだな！」

霊基再臨3

「だーかーらー！ローブは取れないってば。取ろうとするな！」

霊基再臨4

「ありがとう、マスター。ここまで霊基が戻ったんだ。少しくらいローブを取っても…」

あつ、やっぱなし。なしだっつてば！！」

絆1

「ふむ、俺のことを知りたいか…。 なら少しだけ俺のことを話そうかな！ なーに、そんなに長い話じゃないさ！」

絆2

「え？ マシユとの関係？ そうだなあ…。 ひ・み・つ☆え？ キモイ？ そんなあ…。」

絆3

「マスター。これから先も辛い旅は続くだろう。マスターはそれでも進む覚悟はある？ …… そっか」

絆4

「なに？ ロープの中を見たい？ 懲りないマスターだな…。 特異点を全て修復したら考えておく。考えておくだけだからな!!」

絆5

「どうして違う時代の英霊と交流があるかだつて？ まあ…。 過去に会ったことがあるんだ」

好きなこと

「好きなことかーうーん…。 今ある平和…。 かな」

嫌いなこと

「犠牲だね。うん。いついかなる時でも犠牲は許せない」

聖杯について

「聖杯か：： 魔力リソースとしては十分だけど：：」

誕生日

「誕生日おめでとう、マスター。どうか健やかな日を」

会話1

「俺がどの文献にも属していない英霊だから気になる？ エミヤみたいな物だと思ってくれればいい」

会話2

「俺の正体は明かせない。何故かって？ そりゃあミステリアスの方がカッコいいだろ？」

会話3 (マシユ)

「ああ。久しぶりに見たよ。元気そうだった」

会話4 (マーリン)

「マーリン死すべし！ 是非もないよネ！ 行け！ キヤスパリーグ!!」

会話5 (山の翁)

「キングハサン、今の俺を斬っても意味は無いよ。今は：：ね」

会話6 (ジャンヌ・ダルク (裁))

「ルーラーのジャンヌは俺を弟にしてこないし安心出来るなあ……え？なに？ジャンヌが『弟は何処ですか』と言っていた？なん……だと……」

会話7 (ギルガメッシュ (弓))

「いやーかの英雄王にまた会えるとは！お久しぶりです王！え、待つて待つて。なんで『王の財宝』展開してるんですか。ちよつ……」

会話8 (エレシユキガル)

「エレシユキガル……死後君の元へ行けなかったこと、本当にすまないと思っている。あの時の僕は人ならざる身。こうして英霊として存在していること自体が不思議なくらいだ」

会話9 (スカサハ (槍))

「ししよ……影の国の女王……いや、待て！俺は！肉弾戦は！無理なんだあああああああ!!」

マシユ・キリエライト↓サラীগ

「あの……私とどこかで……？あれ？でも何故かサラীগさんとなると落ち着きます」

マリーリン↓サラীগ

「ぐほお！や、やめたまえキャスパリーグ！笑ってないでマスターも止めてくれないかな!?」

山の翁↓サラীগ

「盟約者よ。汝の晩鐘はまだ鳴らぬのか。そうか…」

ジャンヌ・ダルク（裁）↓サラীগ

「弟は何処ですか!!ハッ！こつちから弟の気配が！」

ギルガメッシュ（弓）↓サラীগ

「ほう。よもやそのような姿の貴様と会うとはな。どれ、英霊となってどれほど強くなったか確かめてやろう」

エレシユキガル↓サラীগ

「あなたにあの時どれだけ私が悲しんだかわかるかしら？今度こそ約束は守りなさい。わかった?!」

スカサハ（槍）↓サラীগ

「どれ馬鹿弟子よ。英霊になってたるんでるようだからの。鍛え直してやる。来い…何をしているセタンタ？お前もだぞ」

クー・フリーン（槍）↓サラীগ

「はは！坊主のヤロー師匠に引つ張られてやんの！え？俺も？ぎやあああああ!!」

カルデア英霊召喚第4号 『サラーガ』

ここは人理継続保障機関フィニス・カルデア

ある部屋に職員の本とんどが集っていた

「召喚システム・フェイト、動作正常。いつでも起動可能です」

職員の言葉にカルデア所長。マリスビリー・アムスフィアは頷く

「起動してくれ」

「召喚システム・フェイト起動。」

部屋の中央に置かれた盾から虹色の光が溢れ出し10個の光の玉が回転する

光の玉が回転し出すとカルデア中に警報が鳴り響いた

『膨大な魔力を検知しました。襲撃に警戒してください。膨大な魔力を検知しました。』

襲撃に警戒してください。』

警報と同時にマリスビリーとは別の部屋で様子を伺っていたカルデアの医療機関の

トップ、ロマーニ・アーキマンが叫んだ

「レオナルド!!いつでも迎撃できる準備を!」

「もうしてる!!」

ロマニの叫びに反応したのはカルデア英霊召喚『第3号』のレオナルド・ダ・ヴィンチ

ダ・ヴィンチが魔力の溢れ出す盾の前に移動し様子を伺う

やがて光の玉が人の形を形成し灰色のローブを纏った青年が現れた

「サーヴァント、アルターエゴ。サラーガ。そうか…ここはカルデアか…」

現れた青年は懐かしむようにそう呟き周りを見回した

「この雰囲気… 歓迎されてるわけじゃないかな？」

「いや、歓迎しよう。私はこの所長のマリスピリー・アニムスファイア。一つ質問をしてもいいかな？」

敵意がないことを察したマリスピリーは危険を顧みず青年に近づいた

「答えられる範囲であれば」

「答えてもらわなければ困る。君は先程『ここはカルデアか』と言っていたけど、なぜここがカルデアだと知っている？」

真剣な表情のマリスピリーにアルターエゴ、サラーガは少し困ったような雰囲気を漂わせた

「申し訳ないけどそれは答えられない。けど安心して欲しい。俺は決して君たちに害を及ぼすつもりはない。君たちが成そうとしている偉業。俺はそれに手をかすつもりさ」

「：：ふう。君がどこまでこちらの事を把握しているのかは未知数だが、信用しよう。改めて歓迎しよう。アルターエゴ」

マリスビリーは少し息を吐き微笑みながら手を出した

「こちらこそよろしく頼む。マリスビリー」

サラীগはその手を取った

「ところで：：ここにマシユ・キリエライトはいないのかな？」

「彼女の事まで知っているのか：：ああ、今は無菌室にいるよ」

サラীগは別室にてこちらを見ているロマニを見つけた

「すまない。少しだけドクターロマニと二人で話してもいいだろうか」

「アーキマンと？分かった。けど私も同席してもいいかな？私も君に興味が湧いたよ」

サラীগは少し考える素振りを見せてからマリスビリーを見て頷く

「ちようどいい。マリスビリーにも聞いてもらおう」

「それで僕に話って何かな、サラীগ君」

場所は移ってマリスビリーの部屋にサラীগとロマニ、マリスビリーはテーブルを囲

んで座っていた

「単刀直入に聞くけど、受肉前に千里眼で何を見たか教えて欲しい。ロマニ・アーキマン。いや・・・」

カルデア英霊召喚第1号、ソロモン

平行世界

「単刀直入に聞くけど、受肉前に千里眼で何を見たか教えて欲しい。ロマニ・アーキマ
ン。いや……カルデア英霊召喚第1号、ソロモン」

サラীগの言葉に目を見開く2人

「どこでそれを知った」

冷たい声を出すロマニ

「……平行世界ってあると思う?」

「……は?」

サラীগの突拍子の無い言葉に今度は目を丸くする2人

「一概にないとは言いきれないけどそれが今関係あるのかい?」

怪訝な目を向けるマリスビリーにサラীগは自身のローブを取り顔を2人にみせた

「2人を信用して話そう。僕は別の世界のカルデアのマスターだったんだ」

「別の世界の……」

「マスターだって……?」

「そう。僕は人類最後のマスターとして人理を修復した」

「人類最後のマスター？」

「詳しくは言えない。けど、だからこそロマニがソロモンだと言いきれる」

「人理を修復した事で英霊になったと。だが何故アルターエゴなんだい？人理を救ったなら救世主セイツアか少なくとも基本の7基のどれかのはず」

マリスビリーの予測に感嘆し、サラীগはさらに口を開く

「アルターエゴの定義は別側面。確かに僕のこれは別側面だけど僕とある物が融合したのがサラীগという霊基なんだよ」

「ある物……それって」

そこで2人はサラীগの雰囲気に変化したことに気づく

「厄災の獣って言えば分かるかな？」

「っ！人類悪……!!」

「そう。僕は自分の世界で終局のピーストⅦ。『犠牲』の理をもってカルデアに立ち上がり討伐された。人類最後のマスターの『藤丸立香』と人類悪の『藤丸立香』。2つが融合したのがサラীগという『藤丸立香』の別側面。だからこそ僕はアルターエゴでしか現界出来ない……。人理修復の過程には多くの『犠牲』があった。僕が今現界してる理由と同じ『犠牲』を繰り返さないためだ」

「……にわかには信じ難いね」

一通り話が終わるとマリスピリーは目を伏せ紅茶を口にする

「けど真実だ」

「君の世界で僕らはどうなったんだい？」

「何度も言うけどそれは言えない。平行世界とはいえ未来を知ってしまえば選択する場面で最高の判断は出来ないからね」

ロマニの質問にサラীগは目を伏せこれ以上答える気はないという意味を込めて言う

「本当に信じ難い話だが君がここにいる時点で証明はされている。信じるしかないみたいだね」

「：： やっぱり2人に話してよかった。僕は生前マリスピリーと話したことは無いけど聡い人物ってことは知ってる。ロマニは言わずもがな。他の人間にこんな話をしても信用してもらえないからね。：： いや、ダ・ヴィンチは面白がって信用しそうだけど」

マリスピリーとロマニの頭の中では嬉々とした顔でサラীগに詰寄るダ・ヴィンチが想像された

「ははは。：：。」

結果、ロマニは乾いた笑いしか出せずマリスピリーは苦笑いするしかなかった

「それと、今話したことは機密事項としてお願いしたい。俺みたいな存在は抑止力に目

をつけられてる」

「わかった。しかしこう考えるとカルデアにいる英霊はおかしなものばかりだね。冠位の英霊にデミ・サーヴァント。レオナルドは普通とは言えないし人類悪と来た、これが普通の聖杯戦争なら絶対に参加したくないね」

「同感だよ」

3人は小さく笑いあつた

それから3人は談笑していたがサラীগが徐に立ち上がった

「どうしたんだい?」

「いや、そういえばまだマシユの元に行つてないなと思つてさ」

「君にとつてマシユはどんな存在だい?」

「僕が唯一守りたくても護れなかつた子だよ」

「どう言つてサラীগはローブを被り直しマリスピリーの部屋を立ち去つた

カルデアが騒がしい。

そういえばドクターロマニが今日は新しい英霊を喚ぶと言っていたのを思い出した。

私にはあまり関係の無いことだけど少しの好奇心というものはある。

どの時代の英霊なのか。どのような武器を使うのか。

私は未だにこの無菌室からは出られないけどいつかはここを出て色々なものを見たいと思う。

誰かがこの無菌室に入って来た気配を感じる。

ドクターロマニだろうか。レオナルド・ダ・ヴィンチだろうか。

だが私の予想は外れ目の前にいたのは――

「やあ、マッシュ・キリエライト。はじめまして」

カルデアで1度も見たことがない灰色のローブを纏った青年だった

白亜の少女

「やあ、マシユ・キリエライト。はじめまして」

「あの… あなたは…？」

マシユの顔が困惑で染る

どうやら俺のことは覚えてないようだ

少し残念だ

彼なら覚えていると思っただけだ

「俺はサラীগ。今日カルデアに召喚された英霊だ」

「あつ… 私はマシユ・キリエライトです。よろしくお願いします。サラীগさん」

「うん。よろしく、マシユ」

「うん。よろしく、マシユ」

彼はサラীগさんというらしい。

サラীগさんがこの無菌室に来てから妙に私は落ち着いてる。

私の中にいる英霊は彼のことを知っているからだろうか。

「あの…」

「ん？なんだい？」

「サラীগさんは、どの時代の英霊なのですか？」

サラীগさんは少し考える素振りを見せた。

あまり言えないような事なのだろうか。

「俺はどの時代、どの文献にも属していない英霊なんだ」

どういふ事なのだろうか。

どの時代にも属していない英霊なのに私の中の英霊は彼を知っているのだろうか。

「ただ、過去に様々な偉人、英雄。英霊と成りうる人物には会ったことがある」

そこで私は理解した。

私の中の英霊は過去にサラীগさんと合っていたのだろう。

「なら…私の英霊を知っていますか？」

「知ってるよ。だけど君に教えることは出来ない」

「え…」

どうして？

知っているなら教えてくれても…

「ここで俺が君に答えを教えるのは君の成長にはならない。その答えは自分で見つけるものだ」

「自分で…」

「そう。自分で。君にはその力がある」

「でも… 私はこの部屋からほぼ出たことはありません。そんな私に、自分で答えを見つけないと出来るのでしょうか」

「出来る。君は強い。君が諦めなければ君の中の彼もきつと力を貸してくれる」

サラীগさんは口元しか見えないが笑っているのがわかる。

サラীগさんに言われると本当に自分で答えを見つけないと出来ない様な気がした。

「サラীগさん。その… 私は外の世界のことを知りません。私に、外の世界のことを教えてくれませんか？ 外の世界のことを知って、自分なりの答えを見つけないと」

私がそう言うのとサラীগさんは――

「もちろん」

薄暗いロープの向こうで笑った。

それからマシユに色々なことを教えた
 時にはロマニと、時にはダ・ヴィンチと、3人で教えることもあった

俺が今まで見てきた風景、生き物、全てをマシユに話した

もちろん、俺が別の世界のカルデアにいた事は伏せてだが

マシユは空を見てみたいと言っていたが出来るだろうか

カルデアは南極の山の中にある

外は常に吹雪が吹き晴れることはめつたにない

でも、かつて人理修復を成した時のあの青空をもう一度マシユに…

今度こそ誰も『犠牲』を出さずに成し遂げてみせる

「サラーガ!!」

「ロマニ?そんなに急いでどうした?」

今日もマシユに外の世界の事を教えてから自分に宛てがわれた部屋への帰り道、ロマ

ニが慌ただしく走ってきた

「マリスビリーが——！」

「!？」

このカルデアに来てからの2人の友人の内の1人、マリスビリー・アニムスファイアが

——
死んだ

雛芥子と認められたい少女

マリスビリー・アニメスファイアの死

その事実はカルデアに少なくない影響を与えた

1つはカルデアの所長が死んだということ

1つはアニメスファイア家当主が死んだということ

この2つは娘のオルガマリーが急遽引き継ぐという形で事なきを得た

そしてもう1つ——サラীগがマリスビリーを殺害したという噂が流れていること

本来ならそんなことは有り得ないのだが、何分サラীগの素性を知っているのは現状
ロマニ・アーキマンただ1人なので1番の有力候補に上がったのがサラীগだった

「ちよつと待つてくれ！サラীগはマリスビリーの遺体が発見された時はマシユと一緒
にいたんだぞ！それに、サラীগとマリスビリーは友人だった！殺すはずがない！！」

カルデア管制室の中央でカルデアAチームとロマニが睨み合っていた

ロマニの後方にはサラীগもいる

「マリスビリー所長の死亡推定時刻は昨夜だ。その時間マシユ・キリエライトへの面会

は出来ないはずだが？」

ロマニに反論したのはキリシユタリア・ヴォーダイム

時計塔天体科の主席でマリスビリーの弟子であったAチームのリーダー

「それに調べたが過去の神話、英雄譚、どの文献にもサラীগという英雄は載っていない。素性も分からない奴を疑うのは当たり前のことだろう」

キリシユタリアに続いて反論を述べたのはデイビッド・ゼム・ヴォイド

時計塔の伝承科を追放された男だ

「それは…」

キリシユタリアとデイビッドの反論にロマニは口籠る

「いいよ、ロマニ。こうなるのはわかってた事だ。あんまりこういうのはしたくなかったんだけど」

「その口ぶり、やはり貴様が…！」

デイビッドがサラীগを睨むがサラীগは気にしてない様な雰囲気だAチームの前に立った

「いい加減にしなよ」

サラীগがそう眩くや否やAチームはその場に膝を着いた

「これは：：!？」

「手荒な真似してごめんよ。けどね、マリスビリーは僕の友人だ。友人を殺した疑いをかけられて黙ってられるほど、僕は温厚じゃない」

Aチームが突然膝を着いた理由、それはサラীগの魔力と威圧感に耐えられなかったからだ

それほどまでに今の彼は怒気を纏っていた

「君たちが僕をどう思うかは自由だ。けど僕は友人を殺すほど落ちぶれちゃいない」

サラীগはそう言うのと踵を返し管制室から立ち去った

「：：」

そしてそれを追い掛ける影が一つ――

「おい感情的になっちゃったな」

「この世界でもAチームの人達は何も変わっちゃいなかった

それに俺ではあの爆発から全員は助け出せない

「はあ… はあ… まちな、さい！」

！まさか付いて来てるとは

「芥ヒナコ…」

芥ヒナコ… その名は偽名であり本当の名は虞美人

真祖に近い性質を持つ仙女

「お前までその名で呼ぶのね…」

「それはどういう…」

「最初に違和感を感じたのはお前を初めて見た時。私の中の何かが驚いてるような悲し
んでるような感覚に襲われた。けど、さっきの魔力で思い出したわ」

そんな… まさか…

「随分と禍々しい魔力になったわね、リツカ」

「ぐっちゃん… センパイ…」

「だからぐっちゃんって呼ぶなつての… けどまあ、お前が元気そうでよかったわ」

そんなはずはない

真祖に近い性質と言っても今の彼女は英霊でもなければ神霊でもない

俺の事を覚えてるはずはないんだ

「なんで… 俺の事を覚えて…」

「それは私にもわからないわよ。真祖モドキっていうのと、英霊の私にとってお前は英霊じゃない私の中に刻まれるほど大切だったんじゃないの」

そう言つて虞美人、ぐっちゃんセンパイは呆れた目で俺を見てくる

「それより、なんなのよお前のその魔力。まるで…」

「あの時みたいだつて？」

「…ええ。お前はそんな魔力の質じゃなかったしそもそも私たちに膝をつかせるほどの魔力量なんかなかったでしょ」

「さすがはぐっちゃんセンパイ。俺はね、人理を救ったから英霊になった訳じゃないんだ。人理を救った『俺』と人類悪の『俺』、このふたつが混ざりあったから『俺』は英霊として格上げされたんだ」

「じゃあ…」

「うん。ぐっちゃんセンパイが感じた魔力もAチームに膝をつかせた魔力も人類悪としての『俺』の魔力」

そう

この霊基の魔力はほぼ人類悪としての『僕』の力

人理を救った『僕』の魔力なんて微々たるもの

魔術が苦手なのだって今も変わらない

いくつかの魔術が使えるようになっただけ

それでも――

「でも、またお前に会えてよかったわ。リツカ」

ぐっちゃんセンパイだけは、守ろうと思った

ぐっちゃんセンパイと別れた俺は現在オルガマリーの部屋の前にいた

「オルガマリー、いるかい？」

「誰……？」

「俺はマリスビリーの友人だ。開けてくれないか？」

俺がそう言うのと部屋の扉が開いた

ドアの隙間から顔をのぞかせてるオルガマリーは少しやつれていた

「あなたが……お父様の友達……？」

「ああ。サラীগっていうんだ。初めましてだな、オルガマリー」

「初めまして……」

オルガマリーはそう言つて俺を部屋に入れてくれた

「……」

「……」

うーん気まずい……

オルガマリーはずっとベッドの上で三角座りしてるし

「…… ねえ」

「ーなんだい」

「…… 皆が噂してた。お父様を殺したのはあなたなの？」

オルガマリーにまでその噂は流れてたのか

「俺は殺してないよ。君は自分の友人を殺せるかい？」

「ううん……」

「マリスピリーは俺の数少ない友人だった。友人を殺されてその疑いをかけられて今は憤りを感じてるよ」

「…… あなた、友達が少ないのね」

「…… そうだね。俺の友人は今はロマニだけだよ。他の友人にはもう会えない」

だつて皆英霊だからね

「なら… その… 私が友達になつてあげてもいいわよ… ? あつ… でも… お父様の友達だったあなたに私なんかじゃ…」

「その『私なんかじゃ』つて自分を卑下するのはやめてくれ」

「でも… 私は誰にも認めてもらえてないし…」

『いや——いや、いや、助けて、誰か助けて！ わた、わたし、こんなところで死にたくない！』

だつてまだ褒められてない……！ 誰も、わたしを認めてくれないじゃない……！

どうして!? どうしてこんなコトばかりなの!?

誰もわたしを評価してくれなかった! みんなわたしを嫌っていた!

やだ、やめて、いやいやいやいやいや……! だつてまだ何もしていない! 生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかったのに——!』

ッ!

そうだ

そうだった

オルガマリーは… 所長は…

誰かに認めてもらいたかったんだ

なら僕が――

「誰も君を認めていないかもしれない。けど、俺は君を認めてる」

――認めてあげるんだ

「え…」

「君は強い人だ。誰も認めてくれない。なら見返してやればいい。オルガマリー・アニムスファイアはすごいんだぞって」

「皆を…見返す…」

「そう。マリスビリーが死んだ今、次の所長は君だ。ならマリスビリーよりも大きい組織にして見返してやればいい」

「私に…できるのかな…」

「できるさ。君にはその力がある。なんたって君は俺の友人だからね！」

「…ふふっ。なんだかあなたに言われるとほんとに出来そうな気がするわ。手伝ってくれるっ？」

「もちろんだとも」

オルガマリーの笑顔は少ない時間でしか見れなかった中でも特別に澄んで見えた

日曜日

あの俺が魔力放出した件から幾分か時間が流れた

オルガマリーも立ち直り少しづつだが認められてきている

マシユも無菌室から出てカルデアの研究員兼Aチームサポートになった
ぐつちちゃんセンパイのストレス発散のために何度か殺り合ったりもした
それから、ペペロンチーノとよく話すようになった

もともと俺がマリスビリーを殺害したとは思ってなかったようだ

「あら、サラীগとマシユちゃんじゃない」

「ペペロンチーノか」

「こんにちは、ペペロンチーノさん」

「もう！2人とも！私のことはペペって呼んでって言ったでしょ！」

「は、はあ……ペペさん」

「善処するよ」

カルデア内の通路で話していた俺達だがふと後方から視線を感じた

「ペペロンチーノ、悪いが俺はこれからロマニに呼ばれてるんだ。マシユのこと頼める

か？」

ペペロンチーノに俺の意図が伝わればいいんだが……

「なるほどね……わかったわ。行きましょ、マシユちゃん」

どうやらペペロンチーノは理解してくれたみたいだな

さ……

「出てきたらどうか、オフエリア・ファムルソローネ」

「気付いていたのね」

通路の影から出てきたのは右目に眼帯をした少女

Aチームのマスターとして俺達と戦った先輩

『根源へ至る』という両親の願いと日曜日に囚われていたオフエリアは最期に俺達を助けてくれて死んだ

俺は彼女も助けたかった

シャドウボーダーについて来てくれなくてもいいからカドツクの様に生きて欲しかった

『私達の大切な後輩』彼女は俺にそう言ってくれた

出来ることなら……彼女もあの爆破から救いたい

「あんなに視線を感じてたらね。まだ俺がマリスピリーを殺したって疑ってるのかい

「？」

「まさか、疑ってなんかないわよ。だいぶ、マシユやペペと仲がいいと思っただけよ」
「ペペロンチーノはもともとああいう人柄だと解釈してるからだね。マシユは：：色々と
思うところがあるのさ」

「そう…。」

「気になるのなら君もあの輪の中に入るといい」

「俺がそう言うとおフエリアは見るからに狼狽え始めた

「い、いや…別に気になつてるとかじゃないのよ…？ただちよつと…。」

「あの2人は君の事情は知らない。『根源へ至る』という魔術師の悲願も恐らくだが持つ
ていない。君は自由なんだ。日曜日に囚われる必要も無い」

「あなた…！どうしてそれを…。」

「なあに、ちよつとした千里眼さ」

「まあ、嘘だけどね

「千里眼は千里眼でも俺のは数多の『犠牲』の未来しか見通すことが出来ない

「千里眼…！？あなたはそこまで力のある英霊なのね」

「うーん…まあ、そういう事にしておこうか。さ、早くマシユとペペロンチーノに合流
しよう」

「え、ええ…： ねえ、本当に大丈夫なの…： ?もし拒絶されたりしたら…：」
オフェリア先輩は心配性だなあ…：

「いいからいいから」

「ちよつ…： 引つ張らないでよ!!」

終わりの始まり

「48人のマスター候補は全員いるかしら？え？1人いない？…まあいいでしょう」

オルガマリーがFirst Orderの説明を始めようとするがつまりそれはレフ・ライノール・フラウロスの爆破が起こるということ

ロマニやぐつちゃんセンパイに協力してもらい防衛系の魔術を重点的に鍛えてきたけどそれでも全員を守る程の魔術は覚えられなかった

これ程までに魔術の素人だった生前を恨んだことは無い

「ちよつとロマニ、あなた休んでないでしょ？少し休んできなさい」

「いや、大丈夫だよマリー。人類の未来がかかっている最初の場面にいないとね」

「いいから！レイシフト前には戻ってくること！いい?!」

オルガマリーにそう言われロマニは管制室を出ていく

前回は雰囲気は締まらないからと追い出されていたがオルガマリーも随分と丸くなった

「サラীগ、一応ロマニがちゃんと休めるか見ててもらえるかしら」

ん？待て待て待て

それはダメだオルガマリー

「いやロマニならしつかりと休むさ。何も俺が行く必要はないだろう?」

俺がここに残らないなら爆発は誰が防ぐんだ

「友人としての頼みよ。お願いできる?」

「だけど…」

やめろオルガマリー、そんな目で俺を見るな

「…はあ…分かったよ」

…応Aチームのコフィンとオルガマリーにはできる限りの防御魔術を張っておこう

あ…不味ったなあ

「あれ?サラীগも追い出されたのかい?」

「オルガマリーにお前がちやんと休んでるか監視してこいつて言われてね」

「そんなに僕って信用ないかなあ…」

「信頼されてるからこそ少しの時間でも休んで欲しいんじゃないか?」

「そういうもんかなあ?」

ロマニがいるであろう部屋に入るとロマニはベッドの上でケーキを食べていた

「あ、サラーガも食べる？」

「じゃあ遠慮なく」

「そういえば今日は大丈夫なのかい？」

「何が？」

「君は人類最後のマスターだったと言ってたよね？つまり今日何かあるってことだ。何か起こるから防衛系の魔術を重点的にやってたんじゃないのかい？」

さすが魔術王といったところか

「前にも言ったでしょ。おいそれと未来に起こる事は言えないって」

「うーん、硬いなあ… 教えてくれてもいいじゃないかあ…」

「フオウフオウ」

「フオウの言うとお… り… ん？」

フオウ？

ハッ！まさか！

「失礼しまーす」

「誰だい君は！」

しまった…！忘れてた…！

「藤丸立香ですけど」

「ああ、48人目の……ん？今なんて？」

「すまないロマニ！管制室に戻る！」

「え？サラীগ？！」

「空間移動で行けるか……！」

「オ、ル、ガ、マ、リ、ー、の、魔、力、を、感、知、
間、に、合、え、……！」

「えっ……サラীগ？きやつ！」

オルガマリーを抱えてその場から飛ぶ

Aチームのコフィンや他のマスター候補にも出来る限り防御魔術を掛けておく

——その時俺の目の前が爆ぜた

「くっそ……！」

爆風に吹き飛ばされそうになるがなんとかオルガマリーを抱えながら留まる

爆風と砂煙が晴れるとそこは地獄絵図だった

抱えていたオルガマリーは気絶し、Aチームのコフィンも4つが大破、3つがなんとか残っている

そして…

「っ！」

目の前にはこっちの世界の俺やAチームを除く40人のマスター候補がそこかしこに倒れていた

「ロマニ!!今すぐ40人のマスター候補とAチーム4人の冷凍保存の準備!!オルガマリーと無事だと思われる2人のAチームマスターは俺が今から医務室に連れていく!!」

『わかった!』

俺はそう叫びロマニの返事が聞こえると同時にオルガマリーを抱え直す

無事なのはカドツクとオフエリアとぐつちゃんセンパイか

「生きてるでしよぐつちゃんセンパイ」

「ぐつちゃん言うなバカ後輩」

なんとか残っていたAチームのコフィンの中からぐつちゃんセンパイが出てくる

その服装は芥ヒナコのものでは無い本来の虞美人の服装

「センパイ……その姿は……」

「爆発する直前に自分で爆発したのよ」

「ああ……あれね。それより俺は今からオルガマリー達を医務室に連れていく。ぐつちやんセンパイは残りのAチームとマスター候補達を1箇所¹に纏めておいて」

「……しようがないわね」

「それじゃあお願いね、アサン^{センパイ}」

「了解、マスター^{後輩}」

番外編

バレンタイン特別編～チョコレートカルデアス～

2月14日

すなわちバレンタインデー

世界各国で様々な文化が存在するが藤丸立香等日本人には『女性から男性にチョコレートを贈る』という認識が多いだろう

それは過去の英雄たちも例外ではない

聖杯からの知識でバレンタインデーという文化を理解しているのである

カルデアの女性の英霊達もマスターにチョコレートを渡そうと躍起になっている

それは過去、別の世界でマスターだった1人の英霊も対象なのだ

????????????

虞美人（アサシン）の場合

「ああ、いたいた」

「ん？どうしたのぐっちゃんセンパイ」

「はいこれ。今日はバレンタインデーでしょ」

「今回は手作りなんだ」

「なっ！しょ、しょうがないでしょ！前は喚ばれたばかりだったし項羽様の事で頭が
いっばいだったのよ!!」

「でも今は手作りをくれる程俺の事を考えてくれてると」

「~~~~~っ！いいからさっさと受け取りなさい!!」

「はーい。ありがとねぐっちゃんセンパイ」

「最初からそう言いなさいよ、まったく」

????????????

ジャンヌ・ダルク（ルーラー）の場合

「あ、サラীগさん！」

「やあ、ジャンヌ」

「ハッピーバレンタインです！」

「ああ、ありがとう」

「前回よりも良い出来ですよ！大丈夫です！味も保証します！」

「うん、それはいいんだけどさ。顔、真っ赤だけど大丈夫？」

「え？… あっ、いや、あの、見ないでくださいマスター！これはその…」

「ジャンヌ、一旦落ち着こう」

「は、はい。ひっひっふー」

「いや、そうはならないよね？」

??????????

エレシユキガルの場合

「ごきげんよう、サラীগ。冥界の女主人、エレシユキガルが会いに来てやったのだから」

「エレシユキガル：… 俺が約束を守れなかったからってだいたい強気で来るんだね」

「ご、ごめんなさいマスター！悪気はないのよ…？」

「怒ってないって、俺が悪いのも確かだしね」

「そ、そう？いや、でも今のマスターは彼女だけどサラীগもかつてのマスターだし…」

「はっ！私はマスターになんて事を」

「はあ… エレちゃん」

「ひゃ、ひゃい！」

「俺は全然気にしないって前から言ってるでしょ？すぐ自己嫌悪に陥るのはやめると約束したじゃないか」

「そ、そうだったわね。ごめんなさい。じゃあ、気を取り直して。冥界の女主人からチョコレートを贈ります。有難く受け取りなさい」

「だいぶ量があるねえ…。あ、そうだ。これから一緒に食べない？」

「え？…。しよつ、しよつがないからご一緒してあげるのだわ!!」

????????????

スカサハ（ランサー）の場合

「ここにいたか弟子よ」

「師匠、どうしました？」

「なに、今日はバレンタインデーとやらではないか。前回の雪辱を晴らそうと思うてな」

「いや、雪辱つて…。戦ったわけでもあるまいし」

「弟子に見苦しい様を見せたんだ。それを雪辱と呼ばずなんと言う」

「は、はあ…。」

「此度のは前回とは違うぞ。赤いアーチャーに教えを乞うて甘く、そして美味しいチョコレートを作り上げたのでな」

「前のも美味しかったですよ？」

「……ん」

「俺の事を想って作ってくれたんですよね？ 想いが入った手作りの物が美味しくないわけが無い」

「…… ええい！ 黙らぬか!! 前回に続いて今回もか！ この馬鹿弟子が!!」

「ええ……？」

????????????

カーマの場合

「苛々、いらいら、いらいら」

「また甘ったるい空気だーって不機嫌になってるの？ カーマ」

「ひゃ！ さ、サラীগさん! 私、サボタージュなんてしてませんよ!」

「前回ではあんなにサボってたのにどうしたのさ」

「こ、今回はですね…… その…… マスターさんにまた…… 会えたので…… 少し気合い

が.:」

「え?なんて?」

「な、なんでもないですう!!私に感謝しながらこのチョコを食べててください!!」
「行っちゃったよ。今回は愛のある(笑)じゃないんだ」

???????????

メルトリリスの場合

「サラীগ、いるかしら」

「メルトリリスか、どうしたの?」

「はいこれ、バレンタインよ」

「ありがとう。下らないイベントだと言って帰ろうとはしないんだ?」

「は?やつとあなたに会えたのよ?帰るなんてありえないでしょう」

「うーん、愛が重い」

「なによ、嫌なの?」

「まさか、俺もまたメルトに会えて嬉しいよ」

「そう、また会えて嬉しいわ、私のアルブレヒト。今回もあなたの為に一生懸命作った

わ

「前ウイリス回みたいウイリスに毒 入れてないよね？」

「入れてないわよ。でも今回は私が直接食べさせてあげる」

「あ、それは結構です」

「なんでよ!!この私が食べさせてあげるって言ってるのよ!!」

「それだと俺一人が食べることになるじゃん。一緒に食べようよ」

「…… しょうがないわね…… 今回はそれで手を打ちましょう」

????????????

マシユ・キリエライトの場合

「あの、サラীগさん。今お時間よろしいですか？」

「いいよ、どうしたの？マシユ」

「あの！これ、日頃の感謝を込めて先輩と作りました！受け取ってください！」

「…… ありがとう、マシユ。こちらこそいつもありがとう。君がいるだけで俺は救われ

るよ」

「それはどういう……」

「今の君は知らなくてもいい話だよ。そうだね、いつか大人の君が喚ばれたら少し話そうか」

「大人の… 私…」

「さ、これからマスターの所へ行くんだろう？早く行くといい。今頃大勢のサーヴァントにもみくちやにされてるだろうからね」

「は、はい。それではサラーガさん、また」

「ああ、これからもよろしくね、マシユ」